
とわのこぬこ

uyr yama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とわのこぬこ

【著者名】

2029Y

【作者名】

uyr yama

【あらすじ】

ぬこは今日も、にゃーにゃー、にゃーにゃー。海鳴の街の空は青く。海も、青い。世界は広く、暖かく。やさしいご主人と、その妹たち。そんな優しい環境で、ぬこは前世のしがらみに気付かない。だって、ぬこはぬこだもんね？

ぬいじてこせー（前書き）

地の文は、基本的に童話の絵本的語り口調（女神さまバージョン）です。

ぬじてんせー

身体中が痛い。

呼吸をするのも辛いほど。

いいや、それこそ、生きる事が辛くなるくらいに、身体が痛い。

痛みのせいなのか？

視界がぼやけて何も見えない。

耳鳴りが酷く、聞こえてくる音はザーザーといった異音だけ。

だから周りがどうなっているのかもワカラナイ。

ああ、死ぬのだな……

あともうちょっとだったのにな……

苦節20ウン年。年齢＝彼女イナイトとか脱し、ようやく、
ようやく童貞を卒業できそうだったのに……つ！

クソッ、クソッ、クソッ！！

腹立たしさと無念さで、気が狂ってしまう。そうだ。
だけども、まあ、仕方ないか……

傷だらけで血塗れな青年は、そこで生きるのを諦めた。

彼は諦めが速いのだ。

泣いてすがる恋人と、青年に突き飛ばされて呆然としている少女と、その少女の母親が申し訳無さそうに、ありがとう、ありがとう、と何度も頭を下げていた。

でも、耳鳴りが酷い青年の耳には届かない。

「クソ、マジで痛えよ……」

吐き捨てられた悪態は、恋人の嘆きの慟哭のせいで誰の耳にも届かない。

それでも、今わの際の奇跡なのか、青年の視界がクリアに広がった。耳鳴りがサーーっとひいて、全ての声が聞こえる様になつた。

青い、青い、どこまでも青い空だ。

ざわめきと、嘆きの慟哭が、それら全てを台無しにしてたけど。

視線を巡らせる。

涙と鼻水まみれの恋人と、真っ青にしているトラックの運転手。

そして、黒い子猫。

「生まれ変わるなら、ぬこがいい」

「バカっ！ なに……なに言つてんのよおつー！ つて、ぬこって言い方止めなさいってあれだけ言つたでしょー？ オタク臭いのは止めるつてアレだけ……」

泣きながらそう言つ恋人に、青年は最期の力で笑つてみせた。

「お、まえの、そういうトコが、大嫌いなんだ。だから、もう、別れようぜ。そして、さつさと、俺のことな……か、わす……ちま、え……」

死に際に格好つけるのは、漢のロマン。満足だ。これ以上ないくらいに満足だ。

童貞捨てられてたら、言つ事なかつたんだけどな。

そこで、青年の命の鼓動が止まった。

「ばかあーっ！…！」

だから恋人の嘆きの絶叫は、青年の耳には届かなかつた。

次に気がついたとき、やっぱり田は見えなかつた。

それでも本能なのかな？

暖かい何かにすりよつて、必死にかぶりついた。

周りにも、自分と同じ何かが一杯いる。

なー なー みいー みいー

ああ、この声は、ぬこ だ！

いや、もしかして、自分もぬこなのではなかろうか？

そういうや、死ぬ直前に思つたなー。

生まれ変わるなら、ぬこがいひつて。

そう考へながら、ぬこは兄弟だか姉妹に負けないよう、必死にお母さんネコのおっぱいをちゅーちゅーする。

人間じやくなつたのはショックだけども、これからのはぬこ生、必死に生きる為にはおっぱいが必要なのだ！

元青年……現ぬこはやつぱり諦めが速かつた。

人間としてのプライドをあつさり捨てて、ぬこになつたのだから。

ぬこは今日からぬこになる。

ネコではなくて、ぬこ。

彼女が言つてたではないか。

ネコをぬこと呼ぶのはヤメロッテ。

オタクみたいだからヤメロッテ。

だつたらぬこはぬこになろうつと囁く。

世の紳士たちの為にも、ネコではなくぬこ。

そうすれば、もう、オタクだとバカにされないのだから……

ぬこが自分をぬこだと言つても、しょせんはネコなんだと分かつて
いない。

そんなぬこは、お腹いっぱいオッパイを吸つて、ふあ～と大きく欠
伸をしたあと、兄弟姉妹に囲まれながら、暖かい眠りにつくのだ。

さあ、アナタの望みはかないました。
どうか、今度は幸せに……

ぬこは田の前の光景に、目をキラキラさせた。

ぬことして産まれ落ちて以来、初めて田にした人の文明。
小高い丘の上から見たその光景は、前世の人間だった頃の郷愁を、
否が応にも思い越されるからです。

「みやー」「みー」「みやー」「みやん」「なーなー」

さあ、行くのだ！

つと、ぬこのあよつだい達はぬこを急かしました。

ぬこを置いて、いつのまにやら立派な大人の猫に成長したぬこのき
ょうだい。

でもぬこは、いつまで経っても「ぬこのまんま。

きょうだい達は、みんなみんな立派な成猫になつたのに。
そうして一匹、また一匹とママネコさんの下から巣立っていくきょ
うだいたち。

本当だつたらぬこもあよつだいたちと一緒に巣立つはずだったのに、

ママネコも、あみつだいネコも、ひらちやいぬが心配で仕方ありません。

だからぬこママネコとずっと一緒に。

ぬこが産まれた春の季節から、とっても暑い夏に変わり、色鮮やかな秋に変わり、白い死神が吹き荒ぶ冬になり……

そうして再び春になつたある日、ママネコの下から巣立つたきょうだい達が、ぬこことつての優しい世界を見つけ出し、こうして此処へと連れて來たのです。

この世で最も猫にとって安全だろう、海鳴の町にて、ぬこにとっての安息の地となると信じて。

ぬこは子供の両手に納まる程度の身体をピョント跳ねさせ、きょうだいと、そして大好きなママネコの方をジッと見ます。

「にゃーう（ぬこ、アナタの巣立つ日が来ました）」

「なーう？（なに言つてんの？）」

……前世が人間だったせいでしょうか？

ぬこは猫語が分かりませんでした。

それでも雰囲気に何を言つてるのか分かってるのでしょうか。

小さな小さな両のお皿々に涙がいっぱい。

立派な成猫になつたきょうだいたひに、ふわふわモコモコの類で、すりすりと頬ずり。

最後にママネコの鼻先をペロリと舐め……坂を一気に駆け下ります。

精神が完全に「ぬ」になつた、前世が人間で、今せ「ぬ」のぬ。あよつだことママネコが心配やつて見守る中、コトント足を引つ掛け、

「みやづつーー?」

モモのよつてうるさいと、人間の町へと転がり落ちてこあましだ。

「みやづみやづみやーー?」

思わずぬこに駆け寄つやつになつたあよつだことママネコたが。

でも、

「みやづみやづみやーー?」

ぬこの結構余裕やつな鳴き声にて、足を止め、後ろを振り向きます。

「みやづみやづみやーー?」

一斉に別れの一聲を上げると、「みーつーー」ぬこの鳴き声を背に
猫の世界へと帰つていきました。

わよつなり、ぬこ

猫たちの、別れの言葉……

猫の……野生の世界は厳しい。

もう、会つ事はないだらう、きょうだいとママネ!»。

ぬこは泣きながら転がり、そして……

ひやつぼー。人間じはんがぬこを待つてるぜー！

あつさりと氣分を変えました。

……ぬこは、諦めが速く、氣分の入れ替えも速いのです。

そうして、ぬこになつて初めてのアスファルトに、ぬこになつて初めての海の香り。

ぬこになつて初めての人間に、ぬこになつて初めてのひとつまつち

……

とわの「ぬこ」の冒険が、はじめて始まるのでした。

なーう なーう にゃん にゃん にゃん みゅー・

ぬこの鳴き声が、海鳴りの町に響きます。

ぬこはそろそろ人間の食べ物が恋しいです。

ネズミやスズメがご馳走な生活もいい加減に疲れたし。

ああ、魅惑のジャンクフード……

待つてろー！ コンビニー！

待つてろー！ カップラーメンー！

ぬこは、自分がぬこだって、覚えてるんでしょうか？
ぬこが行つても、コンビニでカップラーメンは買えませんのにね。

みー

むかーしむかし、海鳴の町にてぬいじがおつました。

そのじぬい、

リンカー・コアを持つてたり、気を操って最強ぬこだつたり、
はたまたジュエルシードの力でミコータント化したり、
いやいや、それどころか死にかけて使い魔化したり、

なーんて、いっさいない、普通だけどもちょっと変わったじぬい。

ぬいじは海鳴の町に入るなり誓います。

ぬいじは、町に生きる立派な野良ぬいになる！

ママネー！やめようだいに負けない、立派な野良ぬいになるのだ！

とこととと……

立派な野良ぬいを田舎すぬいが、海鳴の町を短い足で疾走します。

田舎ではコンビニ。人間じゃん！

……そり、こんなちよつと変わった とわのこぬこのお話が、海鳴の町で始まります。

通りすがりの人々が、ほんわかした表情で見ている黒い毛玉。
ちょこんとコンビニの前に座る様が、とっても愛らしい。

「みやづ……」

でも、悲しげに鳴いています。

ぬこの田の前の建物からは、とても好い匂いがしてくるからです。お腹があやつって鳴るのに、ぬこはその建物の中に入ることが出来ません。

カリカリ、カリカリ……

「にゅー、にゅー」

悲しげに泣きながら、入り口の扉に爪を立てぬこ。
おでん、にくまん、お弁当……
数々の魅惑の商品がそこにある。

でもぬこはぬこだ。

人ではないから入れない。

いいえ、入ることが出来たとしても、中の商品を買ひことは出来ないのです。

それに、建物の中の人間が、煩わしげにぬこを睨みます。

ぬこととして生を受け、初めて感じる人間の負の感情。

ビクンッ！ 背中と言わず、全身が総毛立つ。

ぬこは後ずさるよつにして数歩後ろに下がると、次の瞬間にはピコ
ーっと一田散に逃げ出しました。

「みゅあ、みゅーみゅーみゅー（怖えー、人間怖えー）」

ぬこは忘れていたのです。
自分がただのぬこだつて。
力もお金も何もない。ただのぬこだつて。

ぬこは寂しげに周りを見ます。

視界は低く、地面に近い。

今まで森の中で、周囲には猫だけだったから気にしませんでしたが、やっぱり人とぬこは違いました。ぬこであると決めてはいましたが、まだまだ心の奥底では人間だと思っていたのです。

でも、ぬこは強い子です。

たとえ力がない とわの「ぬこ」でも、心の強さだけは誰にも負けない。

だから、「元やん、元やつ（元、こつか）」と、やつぱりあつやつと氣分を変えました。

果たして、「元やんの強さなんじょつかね……？」

それはともかく、ぬこはお尻ぶつぶつ、しつぜフリフリしながら歩き出します。

ぬこはお腹が空こてるのです。

小さな身体でも、こつぱに食べるぬこ。

死の冬を乗り越えただけあって、一日一日程度食事を抜いても死にはしませんが、このままでは力が出なくなつて狩りが出来なくつてしまつのです。

……今はもう、ぬこを守り、ぬこのためにじ飯をとってくれるママ
ネ「はいません。

ぬこは全部自分の力でじ飯をゲットしないといけないのです。

と、その時でした。

ぬこの身体が大きな影に覆われたのは！
マズイ！　ぬこは大慌てで逃げ出そうとします！

ぬこは食物連鎖的に結構下の方に陣取つてますから、自分よりも身体が大きい獣や、空を飛ぶ猛禽類とかカラスなんかに襲われたらひとたまりもありません。

だからダッシュしようと足に力を入れた瞬間、

「腹が空いているのか？」

久々に人間の言葉を聞きました。
ぬこは恐る恐る後ろを振り返ります。

ズボンは黒、服も黒、髪も黒ならば瞳の色も黒。

全身黒ずくめの高校生位の少年が、むつとした顔でぬこを見下ろしています。

ぬこは猫の言葉は分からなかつたけど、やつぱり人間の言葉は分かるんだなと思いながら、「なー」と一声鳴きました。すると少年はコンビニの袋の中から缶詰を取り出し、パカッと開けて、ぬこの前に差し出します。

缶詰には、猫まつしげりーと書いてあるのがぬこには読めました。

「いや、ひへ（食べていいの？）」

ぬこは不思議そつに鳴きます。

「ああ、いいぞ」

「みやう~（ほんと？）」

「ああ、ほんとのほんとだ」

「なーう、なーうつー！」

元人間としてのプライドがまつたくないぬこは、喜んで缶詰に顔をつつこみ、がふがふ、がふがふ、と一心不乱に食ります。

初めて食べる猫缶は、思っていたよりもずっと美味しく感じられました。

それがぬこだからなのか、元々美味しいものだつたからなのかは、ぬこには分かりません。

「乳離れは済んでたか……ミルクと猫缶、どちらがイイのか迷つたが、よかつた」

少年のむつりとしたしかめつ面が、ふんわり柔らかく笑みました。

げふつ

ぬこは全部食べ終わると、小さくゲップします。

そつして前足で顔を「じこじこ」したあと、少年に「みつこー」元気良くお礼しました。

そして『返づく』のです。

「『やうづる』（どうしてぬこがお腹が空こてるのを知つてたの？）

すむと少年は言こます。

「『ハハハ』の前で鳴いてただろ？」

「なーーいへ。（それだけで？）」

「ああ」

少年は言葉少なくそつまつと、ぬこが食べた猫缶をコンビニ袋に戻し、踵を返しました。

「じゃ、またな」

ぬこに背中を向け、手を小さくひらひらと振ります。
それはやぶやけの挨拶。

でも、ぬこは……

ぬこは、この黒いのをじしゃじんに決めた。
無愛想でちょっと怖い田つきだけど、きっと優しい人だとぬこセン
サーが告げるから。

もう立派な野良ぬこになるなんて誓い、すっかり忘れてます。
ぬこはぴょいぴょいと、短い足で必死に少年の後を追いかける。
そんなぬこに困った少年は、ぬこを抱き上げ視線を合わせると、

「家は飲食店なんだ。だからお前は飼えん」

やつぱりせつと告げるのです。

でも、ぬこせそのまま少年の身体によじ登り肩に到ると、しつかとしがみつきました。

そうして少年の頬に何度も頬ずりして、

「じゅじん、ぬこをもふる権利をあげよー。」

なんだつたら、肉球ふにる権利でもいいだー！

少年は大きく、「はあ～」と溜息を吐くと、疲れたよつて血色へと向います。

「一応せゆさんと父さん」聞いてみるが……」

ダメだといわれたら、その時は諦めろよ。?

言外にやつ言つ少年に、ぬこは分かつたと返事をします。

「それでも、もしも許可がでたら、その時は妹のなのはと仲良くなってくれ。俺たちは、あの子に向もしてやれなかつたから……」

「いやー、やべー！」

「俺は高町恭也、お前に名前あるのか？」

「いやー、やべー。」

「なんか、なんか……変なやだな

「なーうつー

……ぬいじはくづこいでるのでしょうか？

少年と意志の疎通が出来ないとい。まあ、気づいても、気づかなくて、ぬいせぬい、なんですけどね。

原作どちらでも、恭也は道端で出合った猫に餌をあげるために、コンビニに行ったりしています。

ちなみにその猫、後に自分の子供を見せるペソードがありなんかして、とってもホンワカです。

幕間 ひるいん？ の憂鬱

私立聖祥大学付属小学校は一年生の教室で、一人の金髪美少女が窓際の席に座っています。

「はあ……憂鬱ね……」

重い空気を肺から出し、言葉通りに憂鬱そう。頬杖をつきながら、とても小学生とは思えない哀愁漂う瞳で、窓の外を見ていました。

「どうしたの、アリサちゃん」

つい先日、その金髪美少女、アリサ・バーニングスの友達となつた月村すずかが、心配そうに声をかけます。

アリサは憂鬱そうな表情を隠すことなく、将来は大和撫子な美人になるわね、この子……と思いながら、

「ちゅうとね……」

そう言つて、手をひらひらさせました。

「話せないことなの？」

「別に……ただ、ちょっと搜してるヤツが見つからないのよ」

それだけ言つと、重い息をハア～っと吐き出し、話はこれでお終いとばかりに再び外を見ます。

アリサには、前世の記憶がありました。

ちなみにアリサ・ローウェルな前世ではありません！
あんなトンデモ悲しい平行世界な前世ではないのです。

かなり、近いけど……

それはともかく、アリサは前世で一人の青年とお付き合いをしていました。

特に際立つた才能がある男ではありません。
イケメンだった訳でもありません。

それでも、前世の彼女は彼のことがとても大好きでした。

IQ180オーバーの超絶美人にして、絶対無敵のお嬢様！

群がる男は彼女の背後関係と容姿にメロメロです。

でも、彼は違った。違ったのです！

どう違うかと聞かれれば困りますが、とにかく違いました。

そんな彼のことが、アリサは好きで好きでどうしようもありません。

だからアリサは、奥手でオタクな彼を押せ押せで口説き落とします。彼女はツンデlena強気つ子でしたが、流石に年齢が20オーバーなだけあって、こういう時は積極的でした。

押せ押せアリサに彼は目を白黒させてしばし呆然としたあと、ひやつほー、これで年齢＝恋人イナイ歴から卒業だぜ！ なんて言いました。

アリサは頬を引き攣らせましたが、まあ、これからは教育しだいよね？ なんて思いながら、につこり笑います。

彼は何かと言うと、脱 童貞なんて叫ぶおバカさんではあつたけど、言つてることと裏腹に、ガツガツ身体を求めようとはしません。

今迄彼女の周りに居た男たちとは矢張り違います。

ああ、やつぱりコイツにしてよかつた。

アリサは幸せでした。あの日までは……

ある日、彼は子供を庇つてトラックに跳ねられ死んでしまうのです。

……アリサは泣きました。

いつぱいいつぱい泣きました。

泣いて、泣いて、泣いて……そうして彼の最期の言葉を思い出します。

お前の、そういうアトコが大嫌いなんだ。だから、もう別れようぜ。
そして、さつさと俺のことなんか忘れちまえ。

カツコつけ過ぎなのよ、バカっ！

私は絶対にアンタのことを忘れたりなんかしないからっ！
……でも、そうね。キチンと、アンタ以外の誰かと、幸せになつて
みせるわ。

だから、だから今だけ……は、泣い、ても……いいよ、ね……

最後にもう一度だけワンワン大泣きしたあと、彼女は立ち直ります。
だけど、世界は彼女にとって、とても厳しかったのです……
資産家の親を持つ彼女は、ある日、親の商売関係のトラブルに巻き
込まれ、誘拐されて、そのまま……

アリサは、首を絞められ意識が遠のく中、最期に思いました。

ああ、死んだ、私……

こんなんだつたら、アイツにさつさと初めてをあげればよかつたな。

なのに、私ったら……

……会いたい。

アイツに、会い、たい……

会つて、今度こそアンタと……

し　あ　わ　せ　に　な　る　ん　だ

次に気がついたとき、彼女は赤ん坊になつていきました。
アリサは長い長い赤ん坊生活のなか、思つたのです。
これはきっと、神様がくれたチャンス。

もう一度、アイツと出会い、今度こそ幸せになるための……

それでも思わなければ、赤ちゃんなんてやってられなかつた、なん

「……」とは秘密です。

「…………サちゃん、アリサちゃん！」

「ふえつー？」

物思いにふけてたアリサは、突然に身体をがくがく揺さぶられました。

アリサを揺さぶっていたのは、すずかと同時期に友達になつた高町なのは。

ツインテールをぴょーぴょーさせる、笑顔が物凄く可愛い女の子です。

前世では友人まるで居なかつたアリサは、すずかと、なのはがとても大切です。

「ねえつー！　ちゃんと聞いてつー！」

「なによ、わづ……」

「あのねあのね、昨日「ひにこねつ、あつちやー」ねさんのがきたの

つ

なのはは手をぱたぱたさせて、その子猫がいかに可愛らしか説明します。

すずかは猫派なので、なのはが仲間になつたことが嬉しいみたい。

でも、アリサは犬派です。

猫も好きですが、どうも彼がぬこぬこ言つてたのを思い出して、ちよつとイラッとする。

なんせアノばか。可愛い恋人ほつといて、猫ばっかり可愛がるヤツでしたから。

まあ、逆恨みつてやつですね。

でも、それはなのはの家にきた子猫には関係のないこと。
アリサは首をぶんぶん振つて気を取り直すと、

「んじゅわ、今日なのはんちであそぼつか?」

今日は一度良いことに、塾とお稽古事はありません。
すずかはあるみたいでしたが、夜からなので嬉しそうに頷きます。

そして、なのはも……

「うんっー。」

元気の好い返事です。

そして、再びどれだけ子猫が可愛らしかを語り始めました。

楽しそうに聞くすずかと、ちょっと呆れ氣味のアリサ。

そんなアリサは、なほの話を聞いているうちに、ふと思いつめます。

生まれ変わるなら、ぬごがいい

あのバカの言葉です。

まさか、ね……

でも、もじそりだったり、ビハーフよ。

33

アリサとおのの博会まで、あともう少しへ……

……でも、お互にこぼづくんでしようか?

「でねでね、お名前は、ぬごやんって叫びのつー。」

ぶーつー… と思い切り吹き出したアリサは、わっと耳へこぼづくかもしけませんね。

「あ、アリサちゃん！？」

「どうしたの？ 大丈夫？」

「あ、はは、は……だ、大丈夫よ、大丈夫。そんな訳ないんだから
つ」

「なにがなの？」

「なんでもないわよ！なんでもつ！」

主人公がただのぬこだつて、みんなキッチンと理解してるよな？

人間にメタモルフォーゼで、アリサとちゅつちゅつなんてないんだ
からなつ！

大体、ヒロ……って誰だよおまヒイきんぱつのあくあ wセダルフ t
gふじこ

この作品自体の年齢的な設定。（原作とは関係なしにて、この設定）

ぬ」 1セコ

「じゅじん 高校2年生（とらぎ的な意味で一年留年）

月村 忍 高校2年生

高町美由希 中学3年生

高町なのは 小学1年生

その他は、なのはの年齢に合わせて考えつつー

高町ぬいせじめつます

しろーが家業の喫茶店に、みゅーが学校に、『じゅじんがなのはをバス停まで送り、そのまま学校へ、最後に桃子さんが家の『継り。

人の気配が無くなつた高町家で、ぬこの時間がのんびりとすぎています。

柔らかいふかふかの座布団の上にひょこと座り、視線の先はテレビ。

ぴつぴつぴつぴーんつ！

お皿の時報が鳴りました。

テレビからタモさんが現れ、ぬこは懐かしそうに目を細めます。でも、ぬこはぷにぷにの肉球で器用にリモコンのスイッチを押してテレビを消しました。

わくわくお皿いさんの時間だからです！

「なーうー なーううー！」

桃子さんがお出かけ前に用意しておいてくれた、お匂いはんの有る
場所へと駆け出すぬこーー！

焼いた鮭の切り身にちくわとお米のいじ飯。

夢にまでみた人間じはん！

ぬこは「みやーおー！」と満足をつけ。

正直、ぬこはあまり期待していませんでした。

本来、塩分は猫によくないからです。

ですから鮭の切り身なんて出てくるワケがありません。
だけども、ぬこのいじゅじんである恭也は言いました。

「塩分は控えめで、出来るだけ俺たちと同じ物を食べさせいやつて
欲しい」

恭也の言葉に、桃子さんは嬉しく思いました。

だつて、今までお願いなんてされたことなかつたんだもの。

だから桃子さんはほりきるのです！

猫に塩分は必要ありません。

内臓に負担をかけるので、与えない方がいいのです。
ですが人間のいじはんは塩分が大量に含まれています。

でも、桃子さんはやりました！

見かけぬこが喜び踊る人間こはんですが、中身はまるで違つのです
！！

ぬこはそんな桃子さんの工夫と苦労も知らず、久々に食べるちくわ
とお米にこ満悦。

焼いた鮭の切り身も、骨と皮も残せず、

はぐはぐ、はぐはぐ……

あむあむ、あむあむ……

ペロリとゼーんぶ食べました。

最後に猫ミルクをいつき飲みして、けふうとげつぱ。

そうして、ことごとく歩き出す。

まんまるまつくりなここまでーこ、かつちやこほんほんみたいなしつぽと、短くぶつとこ4本の足。

そしてなんとかお腹の一部分だけが真っ白なぬこは、高町家で最も日当たりのいい場所、お庭へと続くベランダの板張りで、この家のぼすである桃子さんが敷いておいてくれたタオルの上に寝そべった。そよそよと吹く風が、ぬこの柔らかい体毛をふわり撫でた。ぽかぽか陽気にその春の風はとても気持ちよく、うつり、うつり

夢心地。とても、しあわせな気持ち。

昨夜ぬこは、ぬこになつて以来、初めてと言つてもいいくらいにゆっくり眠れました。

まだ目もあまり見えず、耳も全然聞こえない頃ならともかく、それなりに世界が解り、はつきりとぬこだと自覚して以来、初めて……

昼、獣の鳴き声に恐怖し、夜、風に擦れる草の音でピクンと目を覚ます。

だつて、ぬこは犬が怖かった。

だつて、ぬこは狐が怖かった。

だつて、ぬこはトシヌビが怖かった。

だつて、ぬこはフクロウが怖かった。

だつて、ぬこはカラスが怖かった。

だつて、アライグマに襲われたときなんて、ぬこは死を覚悟したぐらいた怖かった。

だつて、だつて、だつてだつてだつてだつて……

でも、もう怖がる必要はなくなつたのです。
安息の地を、手にする事が出来たから。

ママネコとあやうだいが望んだ、ぬこことつての安全な場所。ぬこは確かにそこへ辿り着いたのです。

「あ、ぬい。アナタはこれかひどいの？」

「みやう~」

「そうだね、ぬい。」

「ぬこは、そんなのなーんも考えてないものね。」

「だって、ぬこはぬいだもん。」

今も学校から駆け足で帰つてくる、ちびっこモンスターの脅威も知らず、ぬこはママネコと、きょうだいの夢を見る……

「ぬこは、もう大丈夫だから安心して。」

「これから、じゅじゅ元気衛生して生きる、立派な飼いぬこになるからさ……」

高町家のお庭に面する板張りで、ふわふわのタオルに包まつて置けてます

ぐでーっとお腹を見せて眠るその姿は、とつとも愛らしく。なのはせ手を丁寧に洗しながら畳えます。

「まーちゃん、まーちゃんかわいい~」

いーえ、なのはだけじゃありません!

なのはの友達のアリサとすずかもメロメロです。時折、ぴすぴす鼻を鳴らし、「みう……」なんて幸せそうなぬいき見ると、じう胸が熱くなってしまつのですー。

これが、萌え……

アリサとすずかはいつもきました。

「どうな夢見てるのかなあ

「わあね。でもまあ、ここ夢見てるんぢゃない?」

ふわふわタオルに顔をこすり付けて寝言なの？ ああああああ小さく鳴いてるのを見たら、誰でもそう思っちゃう。

ねえ、ぬい。

あなたはどんな夢を見ているの……？

それは白い死神の季節。

ぬここの全身が全部埋まつてもまだ足りない程の雪。
その上をてとてと走りながら、ぬここは冬の恐ろしさを心底味わつて
いた。

人として生きてた頃には、こんなに恐ろしきモノだとは思わなかつ
た。

せいぜいが電車のダイヤが乱れたり、滑つて転ばないよつに氣をつ
けなきやと思う程度で。

まず、餌がない。
むしろぬこが餌。

それはどんな季節でもそつだけど、特に冬は餌が少ないから、必要
以上にぬここは狙われるのだ。

ほんとう、どれだけ狙われたことか。
ほんとう、どれだけ怖かったことか。

なんせぬここはちっちゃい。しかも真っ黒なぬここは、白い雪の上でよ
く目立つ。

だからぬここは、こつもととてと真白の雪に、ちひちひ足跡をつけ
て走つてた。

食べられてたまるか！ 死んでたまるか！ と、必死になつて走つ
てた。

それでも…

フクロウに狙われ、そのフクロウをママネコが逆に狩つて。キツネに狙われ、ママネコが戦つて追い返して。

アライグマに食べられかけで、気づいたらママネコに傷口ペロペロペロペロペロ。ママネコはお腹のした。

そうして寒い寒い一面の雪景色の中、死に掛けたぬこは、ママネコの暖かいふわふわもこのお腹のした。

「一 も」

大丈夫?

「み ゃん、み ゃうつ」

だいじょぶじゃない……

前世が人だったせいか、ぬこはママネコの言葉が分からない。でも、何となくは分かっていた。
きっと、ぬこを心配しているのだと、分かつてた。

「み ゃ、み ゃ……ん

『めぐなき』。ぬこ、あつあつへじ『めぐなき』。

ぬこがいなかつたら、ママネコはまつと樂にてを越せたはず。
だつて、フクロウを狩れるへりこ強い猫なのだから。

「みやづ、みやーお」

いいからお眠りなさい、私の可愛こぬこ。
いつかきっと、アナタは誰よりも強い猫になれ。
その日を夢見て、お眠りなさい……

「ひーち、ひーさん」

暖かい……ふわふわもこもこ、あつた、かい……

ぬこママネコはひさひさひしながら、彼女の暖かい毛皮の下
でぬくぬく、ぬくぬく。
冬の凍つつくような風も、冷たすぎてむしろ痛い領域の雪も、ぜん
ぜん気にならない。

ああ、ずっとといつしていたかった……
ずっと、ずっと、ずっと……

だつて、ぬこママネコが大好きだから。

でも、ぬこは決めていたのだ。

春になつたら、遅い親離れをするのだと。
いつまでもママネコの傍に居る訳にはいかないのだ。

だって、ここは野生の世界。

ぬこと一緒にれば、ママネコまで、

死んでしまうのだ……

でも、今だけは、ママネコの傍で甘えよつとぬこは思つ。

あつたか ほわほわ だいすき おかあ…… セン

ママネコは、ぬこが何を考えているのか分かつていきました。
だから自分の下から巣立つていった子供達に、ぬこことって安全な
場所を探すように感じたのです。

なんでそんなコトが出来たんだって？

あのね、ママネコは、この一帯を治めるスシなんですよ？

だれよりも、だれよりも強い、灰色猫。それが彼女。

そんな私の子なのだから、アナタはきっと強くなる。
きっと、きっと、強くなる……

でもねこは、そんなママネコの期待もなんのそのー。
あつたか　ぬくぬく　ぽややん　っと、ママネコの体温に幸せを感じます。

だって、ぬこはすとただのぬこのまんまだもん。

なのは何かに気づいたよびます。

「やうだつ！

と、その時でした。

なのはも、すずかも、もちろんアリサも、ぬこのあんまりにも幸せ
そうな寝顔に、うつとつめいやー。
時間を忘れてただぬこの寝姿を見続けます。

なのははぬこが大好きです！

だからなのはは、ぬこに自分の物をプレゼントすることしたのです！

シインシインな髪が歪なサイドテールになるのも嬉しいに、なのはは自分の髪をじげるコボンを送りました。

「あっ、ダメ！ なのはちやん……」

「待ちなさい！ なのは……」

アリサとすかは、なのはが何をしようとしているのか分からました。

だから声を荒げて止めようとした。

でも時既に遅し。

なのははつボンをぬこの首に巻いて、やゆり「いや、つ」ぬこの瞬
末魔です……

子供の力。

でもぬこにとってはもの凄い力。

そんな力で絞められちゃつたら、ぬこは夢から覚めず、そのまま新
たな場所へと旅立っちゃいます。

ぴくぴく、ぴくぴく……止まらない痙攣。そして、パタッと動きが
止まりました。

また、余ておもしょい。
……れよひながり、ぬい。

なー

ぬこがお風呂から田を覚ますと、そこは喧騒の真っ只中。何だか首が痛いのと、少し苦しい気がするけど、正直それどこのじやない。

叩かれたのか、頭を痛そうにおさえてわんわん泣くのはと、眉を顰めて怒り顔の「じゅじん」。

そんな「じゅじん」に、見知らぬ少女が二人、平身低頭にぺこぺこ頭を下げていた。

「なーう」

ぬこが声をかけると、「じゅじんはホッとした顔でぬこを両手で包み持ち上げた。

「じゅじんは堅い手の平だけど、ぬこは『じゅじんの手が大好き

ママネ』には適わないけどな！」

「大丈夫か？」

「みや？」

「なんでもなこなりここんだ。……なのむー。」

「あ、こ、ひ、」

泣きながら、それでもなまけつ返事を返すのは。

……いつたに何があった、「じゅうじょ？」

「悪こじりとつたら、どうあるんだつた?」

「「るあんなやこかぬの……」」ぬこね、ぬじりやん……

……何を謝つてゐのかわつぱつです。

でも、ぬこは空氣をキチンと読む好こぬいです。

「」

と一概優しくかけてあげるのだ。

「の口、なのはは初めて怒られた。

もうひん、今まで小さい事で怒られた」とせ沢山ある。

それでも、こんな風に怒られたのは、本当に初めてで。

いつもいっ子でいようとしていたなのはは、こりせりて怒られた」とで、肩から余計な力が抜けた。

なのはは好い事したつもりなのに、結果的にぬいを殺しかけてしまつたのがショックだつたけど、それ以上に兄に怒られたコトの方がショックだつた。

でも、すぐに頭を撫でられて、優しく諭してくれる兄にとっても嬉しく思うのだ。

だって、好い子でも悪い子でも、なのははなのはとして、きちんと見ていてくれる証拠だつたから。

そんな当たり前のコトで、なのはは今まで気づけなかつた。でも、もづづいた。

私は、このままでいいんだ、って。

なのははこの口から、べたべたに兄に甘えるようになる。
ぶらりんなのかやさんの誕生である。

それは、なのはと仲良くしてっこひ、とても他愛のなこと。
当然、ぬこは覚えています。

「いやー

「なあ、ぬ」

「みやづら」

「お前に頼んだ」と、覚えてるか?」

「俺は、あの子に向もしてやつてなかつた。だからお前に頬もつと
したんだ。でも、それは逃げだ」

「みやづ..」

「俺が、俺たちが自分から動かないとダメだったんだな……」

「じゅうじんの膝の上には、安らかに眠るのねがいる。
こんなのが今までなかつたことだ。
のはは、誰にも甘えない子だったから。

でも、それは終わりを告げた。

「お前のおかげだな。あつがとく、ぬ」

「ひー？」

ぬじは、じゅうじんが何を言つてゐるのか、わつぱりわからん。

でもま、いつか。

だつて、じゅうじんも、桃子さんも、みやーも、つこでひんすいも、
みんな笑顔だし。

そして、のはも……

「おひこちゃん……ぬいちゃん、ん……だい、す、も……」

といつも幸せそつな寝顔だからなー。

この世界を流れる大きな川。
その流れが、この日変わった。
変えた切欠となつたのはぬいだつたけど、それは本当にひつちやな
モノ。

本当に本当に、ひつちやな、きつかけ。

「おやすみ、ぬい」

「いーちゃん、いーちゃん」おやすみ「いーちゃん

優しい月の光が、ぬいじりしゅじんを照らしていた。

……つて、今氣づきましたけど、ぬこ？　あなた、死んでなかつた
んですね？

オリキャラ設定

ママね口

海鳴や国守台からちょっと離れた場所にある山の奥深く。
そんな山深い森のヌシである、通常の猫よりもふたまわりほど大きい
い灰色の猫。

ぬこを産む前は、天猫拔爪牙（笑）でツキノワグマと戦い勝利した。
後10年ほど生き延びることができたら、猫又ビックリかもの姫
的なヌシになるかもしない。
深く考えてはいけません！

きょうづだい

ママネ口の下から巣立つたのち、各自住む森や山でボス猫となる。色は白だったり虎縞だったり。

現在嫁さん候補がいたり、旦那さん候補がいたり。

基本、普通のボス猫。猫を逸脱した存在ではない。

海鳴や国守台付近に生息はしていないが、その地の猫に相談し、この地の【猫】のヌシである陣内美緒を紹介してもらつて、ぬこの今後をお願いした。

高町ぬこ

前世が人間だったため猫の言葉がわからず、人間の言葉しか理解できない。

ぬこの言葉 자체は猫語wなんで、ぬこの言葉は猫たちに通じてます。

ちなみにぬこの意思を感じ取れるのが恭也。

KYOUUYAではないはずだけど、ぬこの意志を感じ取れる時点でも KYOUUYAかもしない。

ちなみに小太刀でバリアジャケットを斬り裂いたりとかはない。

もちろん、恭也がリンクカーボアを持ってたりともない。

あれ？ いつの間にやら恭也設定に……

ところで、こいつら本当に猫か？ と思つかもしうんが、ところの
猫はこんなもんだw

「ひめこー！」

ぬこが高町家に嫁（？）に来てから、もう随分の時が流れました。

具体的に言えば、一ヶ月ぐらい？

ひとりで随分？とかぐだらなしシッ 「ハササギは受け付けません！

それは横に置いといて、相変わらず成長しない子猫のままのぬこを、
ゼロが訝しげに睨つ高町家……かと思いまや、そんなの全然関係ね
ー。

むじる、

「可愛いからいいんじゃない？」

とはこの家のボス、桃子さんの言である。

「かーさんー？ もしかしたら病氣かもしないんだよー。」

みゅーが少し困った口調でそう叫ぶけれど、

「大丈夫だと思つわよへ。だつて、ぬいがりやんだし」

なんの説得力もない言葉。

でも、一番ぬこと仲良しななじゅじんが、「クンと頷いたりしたもんだから、結局はそのまんまになりそな空氣。

だけど、ぬことは思つのです。

「みやあみやあ、みやー」

ぬこがちつちゅーのは病氣じやなことは思つ。
それでも病院行つて検査するのはいいと思ひやつ。

「だ、そつだ。高町ゆよ」

「あのね、恭也。ぬいちゃんが何思つてゐるのか分かるの、アンタだけなのよ?..」

「わつだよ恭ちゅんー。はたから見たら変な人なんだよー。」

「わ……ゆさんせともかく美由希。今日の鍛錬、覚悟しておぐがい
い」

「横暴だよ恭ちゅんー。」

「なーー。」

「じゅうじん、みゅーはぬいじゅうじんを心配してくれてるんだぞ！」

ぬこはわたわた抗議の声をあげるみゅーの身体をよじ盛り、柔らかおっぱおにしがみつきながら、優しく肉球ふにふこの手でアゴにぱんち。

田下の者に優しくするのと、田上の者とじて判然なのです。

「……仕方ない。美由希、ぬこに感謝ひとつ」

「だからぬいちゃんが何言つてるのかなんて分かんな」とばーー。

ぬいのぬいぱんちを顔に受けて恍惚としながらの抗議は、誰の心に響くことなく、むなしく高町家の朝の空氣の中に消えていきました。ついでに元が人間だから何でしょうな？　ぬいもおつぱねおふぱふ気持ち一です。

……あんま調子にのつてると、刺しますよ、ぬい？

まあ、こんな感じで一ヶ月。

ぬこもすっかり高町家の一員です。

そんなぬこが、いの一ヶ月で変わったことと並べば……

黒こまんまるぼでーに映える、まつかなリボンがついた首輪でおしゃれさんになつたことと、大切なお友達が沢山できたこと。

ちゅうと懐かしい匂このするシンテレ美少女アリサちゃん。
紫色の髪つてなんだよー? な、すずかりちゃん。

そして一番たいせつなお友達は……

「ねえおにーちゃん。ねーちゃん、今日も神社に行くんでしようか?
?」

なのはが田をキラキラさせてます。

ぬこと一緒にけば、つぶらな瞳のあの子と仲良くなれるかもしれません。

なんせ、ぬにナシで行つても逃げられてしまつ。

なのはだけじゃなく、アリサも、すずかも、みゅーも、じゅじん
までも!

「みやん」

「行かないそだ。今日は病院に行つて検査してもいいと書つて
る」

「せつかー、ざんねん」

「また今度一緒に行けばいいだろ。ただ、その時はキチンと誰か

……やうだな、俺が美由希が、アリカちやんのトロの轟かで。」「内の誰かと一緒になきやダメだ」

「はーー」

手を上げて元氣よく返事をするなはが、こゝしょり行くのなら、おにーちゃん さがいにですーとばかりに、ポフッと彼の胸に飛び込みました。

ぬいどみゅー。『じゅじゅんとなのは。みんなひとつ仲良し。

……本埠、とても暖かな家族の風景。

桃子さんと思ひのどす。

これも、みんなぬいちゃんのおかげよね。

もともと仲よかつたけれど、『じゅあ』で仲良しだらじやなかつたもの。

「あつがとへ、ぬいぢゅさん」

「なう?」

ぬいこに「そんなこと言つても仕方ありませんよ?」
だって、ぬこが特別何かをした訳ではないのです。
だからぬこには分かりません。
むしろ、ぬこの方が、かんしゃ、かんしゃなのですよ?」

ただ……

「愛する妻と子供たちが最近冷たい……」

はぶられたせいか、部屋のすみっこでイジイジしてゐしるーがキモイ。

「もう、士郎さんたらバカなんだから」

つついつとそんなしるーに身体をよせる桃子さん。
そしてイチャイチャ、イチャイチャ……

「愛してるよ、桃子」

「私もよ、あなた」

2人を包むラブバリア。

ごしゅじん、みゅー、なのは、そしてぬこは、とても慣れた様子で
スルーしつつ、

「さて、そろそろ学校に行くとするか」

「そうだね

「おにーちゃん。なのははバス停まで送つて行つて欲しいですー。」

「ん。ぬこ、帰つたら病院に行くからいい子にしてるんだぞ

「なーう

ゆつたりと家を出る「しゅじん一行と、それからじばくして慌ただしく出ていく桃子さんとしろー。

そしてぬこもお散歩に出かけます。

この海鳴の町は、とても猫に住み心地のいい街。

海があり、山があり、そして野良猫を診てくれる獣医さんいて、そんな獣医さんの良人は、力ない野良猫たちに餌をくれます。

そんなこの町の猫達の王さま陣内美緒さん。

彼女に今日の病院代をまけて貰えるようにお願いしに行くかー

ぬこは足取り軽く、てとてと海鳴の街を闊歩するのでした。

フーッー！

ペシトショップの前に、スクーターに跨つてる美少女発見！
ぬこはその美少女に向かつてダッシュです！

「なあー！」

「ねっ、高町さんとのぬこじやん。お散歩中かい？」

「こやー」

陣内美緒さん。

ぬこは前世も含め、初めてみました。

リアル猫耳少女！

もしもぬこが人間だつたら、間違いなく口説いてます。

だつて、猫耳だよ、猫耳！

「ふつふーん。ダメだぞぬこー。わたしの好みは、こいつでつかくて、
優しくて、料理が上手な人だかんね！」

「「いや、……」

それは残念です……

「ぬこには久遠がいるじやん」

「みやうみやーー！」

そんなんじゃないし！ 大体ぬこは猫で久遠は狐だぞ？

「あははは、わかってるわかってるって。種族を超えた愛なんて、ロマンチックだよねー。で、なにしに来たの？」

「みやつーみやみやみや、みやん！」

「ほほう、自分から病院行つて注射されるなんて、アンタ漢だね。いこよ、私から愛に言つとく。病院代まけて欲しいってさ」

元が人間ですからね。それほど注射が怖いわけじゃないんですよ、ぬこは。

それよりも、自分が変な病気を持つてないかの方が怖いのです。ごしうじんに迷惑がかかりますからね。

だから、病院代をまける交渉をしてくれる美緒にとっても感謝のぬこです。

「ハーハー..」

「いじつて。これも海鳴猫の元締めたる私の役目だかんねー。」

この町は、本当に猫に優しい町だ。
ぬこせ、この町に連れてきてくれたママネコときよひだいへ感謝を
捧げたい。

だからや、またいつか会えるよな、かあさん……

と、そんなアンニコイでノスタルジックに良い感じでキメタぬこだ
ったの!……

「あー、美緒ちゃん！ その子めりーー！」

12~14才くらいにみえる薬臭い胸が平坦な美少女が、はあはあ
息を荒げながら、手をこぎこぎしてぬこじりよつてきたせいで心細いです！

少女は腰まで届く銀色の髪がキラキラ輝いて、とても可愛い美少女
なのですが、どこか近寄りがたい雰囲気を醸し出していました。
普通の猫なら薬臭い時点では敬遠しますし、何よりそのオーラ。只者
ではありません！ よつする、怖い……

でも、ぬこせ『そこは』特に気にならませんでした。

薬臭いのは病院帰りなのかな?とは思つけど、前世が人間だつたら特に薬臭いのはきにならないし、ぬこには変なオーラはわかりません。

「おひ、フィリスちゃん。この子は高町さんちのぬこ。たぶんだけど、この子ならフィリスに懐いてくれるんじゃないかな?」

「ほ、ほんと?...」

美少女だけど、変に鼻息荒く興奮してるのは何だかな。
だからちょっと煩わしいんだけど、黙つて頭なでされたりもふ
もふされる。

美緒さんの顔を潰すわけにはいきませんもんね。
本当は、胸が平坦なの、ぬこの好みじゃないんだけど……

「ほんとだー! 私が触つても逃げないつ!」

「……やつすぎないようにな。ほどほどにしないと、この子にも嫌
われるよ? それにこの子さ、久遠の……」

「あー、この子がそうだったんだ。うーん、もう、かわいいつ。……
ね、ねえ、ぬこちゃん。久遠なんかより、私と恋人になりません
か?」

「こやん

久遠は恋人じやない。でも断る。

「みやみやみやみやん」

おひばお大きくして出直してきやがれ。

「いや、流石にそれは言こすぎだつて」

でも、ぬこの言葉が解らな」「フィリスは、嬉しそうにぬこを抱きかかると、まずは頬ずり。

そしてお腹を自分のちゅぢやな可愛い顔に押し付けて、もふもふもふもふ。

次は肉球ふにふにふにふに。

10分がすぎ、20分がすぎ……30分になり1時間が……

おわらない、おわらない、おわらない……

ぬこのちゅぢやな耳がピーンと立つて、むこむこ尻尾も天をつく。

「なー！　なーなーなーーー！」

いいかげんに、しるーつー

以降、フイリスちゃんはウザい子としてこの認識を抱いていました。

……ちょっとかわいいんですね？

今回名前の出たとらはキャラを知らない人のための人物紹介

陣内美緒……とらは2のヒロイン。猫耳猫尻尾付美少女。恐らくだが、夜の一族の血を引いた先祖返りだと思われ。

つてか、99.99%は人間だが、残りの0.01%が猫の遺伝子持ち。つてのが原作設定。意味がわからない。

先祖が猫と結婚して子供でも産んでたのだろうか？ それともハイブリット・ヒューマン？

前者だとしたらアリサがメインヒロインでも問題ないな。この世界では猫と子供作れるって証拠だしw

話戻して、養父である啓吾と高町父はこつそり繋がりがある設定だが、それが生かされることは多分ない。

フィリス……とらは2で敵役。とらは3でサブキャラ。そしてリリカルおもちゃ箱でヒロインに昇格した出世人。

HGS持ちの戦闘用クローン体。似たような設定のフェイトよりも数倍過酷な原作設定持ち。つてか、彼女の設定をマイルドにしたのがフェイトっぽい感じ。

小動物大好きなのに、病院臭いせいなのか盛大に嫌われる可哀そ
うな人。

ちなみに彼女のオリジナルであるリストイは、逆に動物関係には滅茶苦茶好かれてる。つてことはHGSは動物に恐怖感を与えない？現在はお医者さん。成人ぶつてるけど実年齢は7~8才。みかけがちみい美少女である。

暗いの怖い。幽霊やだ！ あんまり怖がらるとお漏らしちゃうかも……恭也とのあのシーンではしつかりお漏らしちゃったしね

念の為に言つとくナビ、ぬこのヒロインではない。

愛……とらは2のメインヒロイン。獣医さん。野良は無料なんて恐ろしい経営をしてる人。料理はシャマル級といえば理解できるな？リリカルの第一話でユーノの治療したのはこの人らしい。つてことは、ジユエルシードの被害をとともに受けた可哀そうな人でもあるのだろう（涙）

本作ではロリジャイこととらは2の主人公耕介と結ばれた設定。ちなみにこの作品において名前だけで出番はない。

久遠……とらは3での那美ルートの鍵キャラ。リリカルおもちゃ箱でのなのちゃんの相棒。リリカルなのはそのポジションをユーノに取られた。

永遠の子狐モード搭載。巫女幼女に変化可能。大人巫女に変化すると尻尾が5本に増える。

昔彼氏を残酷にねつ殺されてぶち切れた衝撃で祟り狐に。日本3大悪妖に並び称される。でも今は猫にすらいじめられる。でもとつてもつおい……はず。雷ばりばり。く。くう～ん。

これでどんな人物なのか分かつた奴は天才だ。

この作品、主なオリキャラはネコしか出ません。ってか、ママネコ、きょうだいぐらいなもん。

高町なのは　ぬいのこぬ風景

これは夢だよね……？

なのははそう思った。

だって、夢の中の大人になつたなのはの周りには、家族がない。大切な大切な家族が。

なのはは笑っていた。

それが当たり前なんだと。

なのはの両隣にいる友人と思しき2人。

アリサとすずか……ではない。
見知らぬ人だ。

しかも夢の中のなのは空を飛んだ。それも、とても気持ちよさそうに。

少し羨ましいと思つたけれど、その後の自分の姿に、やつぱりこれは夢なんだと拒絶した。

だって指からビームを出して、「少し、頭冷やそうか……？」って怖いことを言つてゐるから。

ビームを浴びせられた女の人の恐怖と絶望と虚無に苛まれた顔が、なのはの脳裏に焼きつく。

……むしろ私が頭冷やそうよ？

なんて思いながら、なのはは心の底から願うのだ。

帰りたいと。

大好きな家族と、親友と、ぬいちゃんの居る、あの場所に。

わたしは高町なのは、小学一年生。

家族は父と母と大好きな兄と姉。それにぬいちゃん。
親友はアリサちゃんとすずかちゃん。

得意な科目は理系全般。

趣味はゲームとふにふにともふもふ。

特技はAV機器の取り扱い全般ともふもふ。

将来の夢は、おかーさんみたいな喫茶店の店長さん兼もふらー。
それか、おにーちゃんのおよめさん兼ふにー。

この2つの夢の素晴らしいところは共有できる所だ。

なのには信じてゐる。奇跡をー

たとえば、実は自分は母の連れ子で、兄は父の連れ子とか……
そうすればなんの問題もなく結婚できるー

そうして、おとーちゃんとおかーさんのよひこ、おにーちゃんとなのははふたり仲睦まじく、平穏に、幸せに暮らしていくのだ。

そう、だからわざとこれは夢。夢なのです。

もう魔法少女になりたいとか、お姫を自由に飛んでみたいとか思いません。

だから帰して。わたしを、家族のもとへ、かえし、て……

なのはは、夢の中で大人になつた自分が、「プラスター3、エクシードモード発動！」とかいつて光り輝くのを最後に、目に映る光景全てが光になつた。

光、光、光……

その光の先に……

……手を伸ばす。

光の先に僅かに見えた黒いなにかにむかつて。

それを掴んだかと思った瞬間、目が覚めた。

なのはは息をハアハア切らしながら、のそりと身を起こした。

不安に苛まれながらキヨロキヨロ周囲を見渡せば、見覚えのある部屋。

部屋の中はまだ暗く、まだ夜明け前なんだと分かった。

「やつぱり、夢だったの……」

ホツと胸を撫で下ろし、なのはは寝汗に濡れたパジャマのまんま、もう一度お布団を頭までかぶつた。

まだ私が起きていい時間じゃない。

そんな言い訳をしながら、なのはは今度こそ好い夢を見るのだと、もう一度田をつぶる。

どこがみ合つて喧嘩してゐる夢だった。

「ちょっと！　いい加減にはなしなさい！」

「おー！ 私とこいつはまだよねー？」

「ちがい。おつねじゅなこ。くわんとこひこや。」

なのはとすずかは、そんな2人を見て笑うのだ。
それはとても楽しい夢だった。

とてもとても、とても……

だから……

なのはは祈ります。

この夢が未来になれど。

さて、高町家の朝はとても早い。
でも高町なのはの朝は遅いのだ。

兄と姉が剣術の朝稽古に出ても眠り続け……

父と母が家業の喫茶店の準備に家を出ても眠り続け……

兄と姉。父と母が朝食のために家に戻ってきて、まだ寝てる。

でも、それは仕方ないとなのはは思うのだ。

だって遅いっていつても、それはなのはの家族と比べてのことでの一般的な家庭から見たら十分及第点である。

兄と姉が朝稽古に出るのは日が昇る前。

父と母はそれよりも若干遅いが、それでも日が地平線を照らす頃。

元より低血圧気味ななのはには辛すぎた。

それでも起きようとする努力はした。

大好きな兄の朝稽古を見てみたい。

もしくは疲れて帰つてくる兄を笑顔で出迎えてあげたい。

だけども、無理して起きてもフラフラで、見かねた兄と姉に自分の部屋のベッドに放り込まれたのも最近の記憶だ。

そつは言つても、以前に比べれば大分よくなつたのも事実。

前は朝食の準備が出来てから起きたものだが、今は朝食の準備が完全に終わる前に起きることが出来た。

しないけど。

なぜかつて？ それはね……

キ、キイ……

あの子のために僅かに開いたままにしてあつたドアが、軋んだ音を立てて開いた。

起きる時間なんだ……

2度目の夢は楽しかったから、もう少しつと寝てたいです。

そつ思わなかつたと言つたらウソになるけど、それ以上の欲求がなのはにはあつた。

思わずまぶたを開きそつてになる衝動をこじらせて、なるだけ自然に寝息をくーくー立てゐる。

するとなのはが眠るベッドの上に、ぴょんと何かが飛び乗る衝撃。

トトトトト。

足元から枕元に歩み寄つてくる少やかな気配。

顔がくふふ、とこせはせわ。

話を聞いたすずかとアリサが心底羨ましがつた、なのはの毎日の朝。

あれ以上の快楽はあんまりないこと、なのはは思つてゐ。

だから、さやくせやくせやくひー

なのはの願いが通じたのか、それともそれがその子の役目だからなのか。

「ヒニ」

耳元で鳴く子猫の鳴き声。
早く起きると鳴いてくる。
でも、なのはは起きない。

「ヒーヒー」

起きない。

ゼーつたにー！ 起きなーーー！
だから、早くしてよ、ねいじやん。

期待に胸が熱くなる。

それはまるで恋のよひこ……

もしもおひーちゃんがいなければ、なのははもうおひーちゃんに恋したかもしれません。

なんて思つてみると、なのはの頬にぺしん！と衝撃が走つた。

ぬこのふにふに肉球で叩かれたのだ！

思わず「伝説の魔法少女、カードキーパターも、ひがやんみたいに、
はにゃーんってなつちやいわ！」

でも、まだダメ！　あと4回…　4回ね！　ぱんちあれるまでは、ぜ
ーつたに起きないつー！

「なーう？」

おきないの？

セツニヒガれてる仄がして、なのはは罪悪感が……

でも絶対に起きないもん！

無駄に闘志をみなぎらせるのはだつたけど、そんな彼女に応えた
のか、ぬこのぬこのぱんちが再び炸裂した。

「じゅーー　じゅーー！」

ペしんー　ペしんー！

右ぬこのぱんち、左ぬこのぱんちの素晴らしこmodoのパンハンドレーション
ブロー。

なのははせわつ昇天しかばやこやつです！

だけど、まだ！　まだなのっ！
あとにかいっ、にかいなのっ…
それまでなのはは死ねないのっ…

そんなんのはの決意に応えてか、ぬいはなのはの平坦な胸の上に
つかると、大きく両の前足を上げた。

そうして……

「こやつっ！」

なのはの両頬を挟むよつこじて、ぺしん…っと今必殺のだぶるぬい
ぱんちりっ…

ぬいのふに肉球が、なのはの頬をふにふにする。

しあわせ……

小学一年生にして、ちよつと間違つた方向に逝きかけてるなのはは
今日も元気。
頬を挟んでつこじて、ぬいの胸を抱きかかる様にして起き
上がる。

「ぬいよーぬいよーちゃん！」

「みー」

至福の顔で挨拶するが、なのははそのままぬこを押し倒す。ふわふわもこもこのお腹に顔を押し付けまふまふするのだ。なのはの毎朝の習慣は、ぬこぱんちで起じられて、そうしてぬこのお腹をモフる。

一級の【もふらー】【ふにらー】として自然な行為。

もふもふ、もふもふ

まふまふ、まふまふ……

「せいや～……しあわせなのが

「...」
「...」

「あー、またやつてるよ、なのは……」

「なのははつたら、ほんとにぬこちゃんのことが好きなのね」

これが、高町なのはのぬこがいる風景である。

こんなのが、毎日、毎日……

いつか彼女が大人になるその日まで、ずっと、ずっと、続くとい
いね。

おまけ（理想郷分打ち切りEND用未来話）（前書き）

以下の内容は、この先の展開とは違います。

以下の話は、本編より100年後……すずか以外の人間は皆お亡くなりになります。

ついでに一つ。

この「とわのこぬこ」の地の文は、童話の絵本的語り口調（女神さまバージョン）での他人称を基本にしています。

おまけ（理想郷分打ち切りENDO用未来話）

海鳴市国守台。

そこには、今の時代にまとめても珍しい、深い、深い、森がある。

市に隣接するようにつつとうと木々が生い茂るその森は、市民の憩いの場としては深すぎるものの、子供が迷って危険だ、とか言われることのない不思議な場所だ。

それは、なんとかと言つと……

不安そうにきょろきょろ辺りを見回しながら、とぼとぼ森の中を歩く一人の少女がいた。

年の頃は小学校に入学したかしてないか。

髪は栗色。セミロング程度の長い髪をツーテールにしてるのは、母親の、そのまた母親の、そのまたまた母親の……と、先祖代々受け継がれし伝統の髪形。

そして、大きいクリクリした瞳には、涙が今にも零れ落ちそうなく
らい、たまっていた。

「あひ……ママあ……」

迷子なのだろう。

泣き出す一歩手前の声だ。

でも、少女は生来の気の強さからか、必死に泣くのを堪えてた。

もつとも、それが決壊するのも、時間の問題だらうけど……

バサツと大きめの鳥が羽ばたく音が森に響く。

少女はビクッと身体を震わせると、遂に我慢しきれなくなつたのか、
ボタンと涙の一滴で地面を濡らし、スンと鼻をすすつた。

大きく口を開けて、悲鳴のような助けを呼ぶ鳴き声を上げた瞬間、
でも、「みやー」と小さな猫の鳴き声が、少女の鼓膜を震わせます。

少女はグシグシ泣きながら、猫の鳴き声のした方を見てみると……

そこには、小さな少女な、黒い子猫が。

「二やひ？」

どうしたの？

少女には、子猫が自分に近づいてくるよのを感じました。

「あのね、なのは、迷子なの……」

少女は足元にすり寄つて来た子猫を抱き下げるとい、すんすん鼻をすりながら、どうして自分が迷子になつたのかを説明しました。

お庭で遊んでいたら、ちょっとした不注意で、おじいちゃんが大切にしている盆栽にボールを当けて割つてしまつたのだ。

そこで謝ればよかつた。そうすれば、少し怒られるだけで終わつた話だつたのに。

でも、謝れなかつた。適当な言い訳をして、家を飛び出してしまつたのだ。

そしてそのまま隠れるように森の中に迷い込み、迷子になつてしまつた、といつわけ。

それを聞いた子猫は、「みやうつ！」と少女を咎めるように一喝鳴くと、ぺしんと少女のほほにぬいぱんち。

少女は子猫のふにふにした肉球がとても気持ち良く感じたのだけれど、自分が怒られているのだと分かっていたから、「ごめんなさい」と素直に謝つた。

そして思うのだ。どうしてあの時謝れなかつたのだろうかと……

そのことが情けなくて、恥ずかしくて……ぽろぽろ、ぽろぽろ……涙が次から次へとこぼれます。

「かえりたいよ。……ママとおじこがやんばりめんなむこしたいよ
お……」

えんえん泣きながらいつ言いつ少女に、子猫は、「なーつ！」まかせ
ろつ！ そう言って、少女の腕の中から飛び出しました。
そしてもう一度、「なーつ！」大きな、大きな、森中に木靈する大
きな鳴き声。

すると……

「ぐーん」

可愛いつぶらな瞳の子狐が。

「こやつ？」

長い金毛で、なんとか尻尾が2本ある、とても美人な猫が。

それぞれ現れて子猫の両隣りにちょこんと座り、少女の方を見上げ
ます。

そして、もうひとつ……

「あー、こんなとこにいたんだ。だめだよ、なのはちゃん。みんな

心配してゐるよ?」

紫色の長い髪。とても美人な女のひと。
昔、昔、いつぱいむかしから、なのはの高町家の大切な友達。

「すずかおねーちゃんつ！」

少女は、すずかと呼ばれた妙齢の女性に抱きつき、わんわん大泣き
すると、泣き疲れたのか、そのまま寝つてしましました。
すずかは少女を大切そうに抱き上げると、ホッとした様子で少女に
微笑みかけながら、

「ありがと、ぬこちゃん、久遠、それに……」「こやー」気にし
ないでいいわよ、すずか。「もへ、お礼くらい言わせてよ」

でも、金毛の猫は、ふんつしてしゃつぽん向くと、そのままぬこと呼
ばれた子猫の横に立ち、「みやつ」帰るわよ。そう言つて、すたす
た立ち去ります。

「またね」

「いやー」

「ぱいぱい、久遠」

「へー」

「みんなをよろしくね、ぬいがらん」

「なーつー。」

「みんな、本当にありがとう。おいしいもの用意しておくから、今度食べに来てねー、絶対だよー」

「「「」」」

わあつと、森の中に帰った子猫たち。

すずかは名残惜しげにいつまでも子猫達の去った方を見ていたけれど、「さあ、帰ろうか。ちっちゃいのはちゃん」小さな声で、腕の中で眠る少女に告げると、人の住む街に足を向けた。

人間が去って、森は、少しだけ静かになつた。

風の音、鳥の鳴き声、獣の唸り。

自然な森の、静かな生命の音しか聞こえない。

国守台には『主』がいる。

長い金毛の長毛種の猫又と、大きくなったり、小さくなったりする5尾の狐。

そして、その2匹の旦那さまである、こじぬこ。

市民に愛され続ける3匹の獣の王がいるから、いつでも国守台の森は、とても人に優しい、大きな森で。

とわのこじぬこが、守っているから……みんな、大好き。

おまけ（理想郷分打ち切りEND用未来話）（後書き）

理想郷打ち切りエンドバージョン
しかし書きあがつた時には既に消去
仕方なく活動報告上げした話です。

注意！

本編でぬこは獣の王フラグを立てる予定は消えました。
本編でアリサは猫又フラグを立てる予定は消えました。
以上を頭に叩き込み、次回からの話を読みください。

「あんまりはんたー むー」

その日、むーは自分が狩った獲物をじゅじんに見せました。胸をはり、「なーつ！」と自信満々だ。

じゅじんは数瞬、目をパチクリさせたあと、ふわっと笑ってむーの頭を優しく撫でます。

「頑張ったな、むー」

「みやーー！」

「おっ、凄いじゃないか！」

「にゃーん！」

じゅじんもしろーも褒めてくれます。

桃子さんとみゅーは、ちょっと複雑そうだけど、それでも一杯褒めてくれた。

ただ、なのはだけが……

「めーつー。ぬこちゃん、スズメさん食べちゃ、めーつなのつー...」

「なう？」

焦った様子で両手をばたばた。

ぬこはなんで？と首を傾げます。

だつて、このスズメはぬこが狩ったんだよ？

「なのは、ぬこは猫だ。猫である以上、狩猟は本能なんだよ

「で、でも、スズメさん、かわいそそうだとなのはは思います！」

ああ、そうだ。 そうだった。

ぬこはなのはの言葉にようやく気付いた。

自分も人間だつた頃に、こいつ風にスズメ見せられたのなら、きっとなのはと同じ反応しちだらうつなつて。

ぬこはぷにつけした肉球の下で、まだ死にたくないともがいでいるスズメを見てみた。

ばたばたばたばた……羽を必死に羽ばたかせて。

ぬこのアギトから逃れようと必死なスズメを……

舞い散るスズメの羽綿子。

急に湧き上がる罪悪感は、人間だったこの命残でしょうか……

でも、ぬこはもうぬこなのだ。
もう、沢山の命を狩っている。
その命、血の一滴まで無駄にはしてないと誇れるけれど、でも、でも……

肉体は精神の器という。

ぬこは、もう人間じゃなく、ぬこなのだ。
ぬこは、狩った命に対する罪悪感を捨てた。
きっと、その命に対しても失礼だから。

でも、チラリと見えた。

なのはは怒ってる。スズメを狩ったぬこを、怒ってる。

「……みい」

悲しそうな声で鳴くぬこ。

「あい……」

そんなぬこに、なのはも『まづそつ』な声をもらした。

「なあ、なのは」

「はー、なんでしょうか、おーーひちゃん……」

「昨日のタゞはん、何を食べたか覚えているか?」

「えっと……チキン……ライス……です……」

それだけでなのは、「じゅじんが何を言おうとしているか分かりました。

昨日なのはが食べたのは、鳥さん。

ぬこちゃんが捕まえたのも、鳥さん。

違には田の前で生きてこらいかないかだけ。

「それにな、なのは。猫が自ら狩つた獲物や宝物を見せてくれるのは、信頼と親愛の証なんだぞ?」

「…………うん」

ぬこは悪いとしたわけではないのだ。
でも、なのはの感情は納得できない。

今もぬこの足元では、必死に生きようともがくスズメがいる。

「みやづ……」

そして、おやるおやる、なのほの様子を伺つむ。
なのは、はふう……と大きくためいき。

そのため息は、小学一年生にしては、とても大人びたためいき。

「ねえ、ぬこけちゃん。あのね……」

その日から、ぬこは週に1～2度程度、狩りをするようになった。
きっとそれは、高町家の飼い猫じやないと、中々許されないと。
高町家の家主である士郎じやないと、嫌悪されてしまつこと。
そんな士郎に育てられた高町の子供だから……きっと。

初めは庭でスズメ狩り。

次に高町家から出て色々な場所で色々なものを狩つた。
最近のお気に入りは海。

砂浜で磯ガニを捕まえたり、干潮で出来た潮だまりで魚を捕まえた
り。

そしてどんな獲物も、最初の一匹田は高町の家族に披露する。

……
じゅじん)、もも(も)、みゅー(しるー)、なのほ(なほ)

みんなみんな褒めてくれる。
ぬこを一杯、ほめてくれる。

「ぬいがせ。 今日せねひで皿回しの皿へ。」

「みやひひ

「今日は狩りの皿だねつだ」

「あひ……おとドキチソと歯磨きしたなきダメだよへ。」

「なーひ」

「で、今日せねひで皿回しの皿へ。」

「ひひひ

「国守のカヘ行つてみるやうだ

「氣をつけてね？ あの辺、野良犬とかも出るやうだからね？」

「みやひ

あさとせむはなたー むー」(後編)

ちあんあら・うyr ya māは昔からスズメやこのじきをいひ
ふ。

恐りしく赤ちゃん語の一種だと思われ。

わらのねじさん・おやつを貰つた場合、一頃り喜んだあとで飼い主
であるu yr ya māに何度も見せこ(皿邊?)にくる可憐いや
がてに愛分明るへて(皿邊?)

かのじょとのやうに

春が終わり、夏がきた。
暑い暑い夏だ。

ぬーじはーじの季節があまり好きじやない。

だって、毛皮が暑くて蒸れるんだもん。
それでも冬よりは断然マシだけぞ。

「やー」「やー、ぬー語で独り言いいながら、八束神社へと続く長い
長い石段を、よいしょ、よいしょとよじよじ登る。

10段、20段、30段……

ぬこの小さい身体では、とてもきつこ石段だ。

それでも野生の力なのかな？

都合、軽く100段は超える石段を、せせり疲れた様子もみせず、
一気に鳥居のある場所まで到達した。

ぬーじは見晴らしの好いこの場所で、海鳴の街を眺めます。

石段の下つた先の道。

そこからまっすぐ先に、ぬこの住む高町家がある。
更に視線を遠くにする。

天高く舞うように飛んでいる、白い鳥……カモメの群れが見えた。
その眼下には、空とも見紛う青い海。

ぬこは、すうーっと、大きく息を吸い込みました。

……潮の香り。

山の緑の香り。

アスファルトが焼けた臭い。
車の排気ガスの臭い。

それら全部がこの街の香り。

「みやー」

夏のキツイ日差しが差し込む。
目を細くする。

もう一度。

「みやー」

今度は、海まで届けと大きく鳴いた。

すると、遠くに見えたカモメが大きく旋回した。

まるでぬこの鳴き声に応えたみたいに。

ぬこは前足をひょいとあげる。

ちつちゅーい顔の横に上げられた前足は、ぷにぷに肉球が丸見えです。そして、最後にもう一度「みやーー！」今まで以上に大きく鳴いた。

再び大きく旋回するカモメ。

ああ、この街は本当にいい場所だ。

優しい街に、優しい住人。

暖かい高町家と、その友人達。

そう思いながら、遠く、遠く、海の向こうをぼーっと眺めた。

鳥居の真下。その中央にちょこんと座り、いつまでも、いつまでも、飽きることなく遠くを眺めた。

そうしてみると、ぬこの背後。

鳥居の向こうにある神社から、一匹の獣の気配が近づいてくる。

ぴくんっ。ぬこの耳が反応した。

……狐の気配だ。

狐は、ぬこの天敵です。

でも、ぬこは動こうとしない。

だって、この狐は……

「ぐう～ん」

「みい」

ぬこになつて、初めて出来た、お友達。
アリサやすずかも、お友達といつたらそりだらう。

でも、違うんだ。

ぬこには解る。

この田の前の子狐が、ぬこととても近い存在なんだつて。
ぬことおんなじ、ずっとちつちつやいまあなんだつて。

ぬこは子狐……久遠にまとわりつかれながら、この子とお友達になつたあの日のことを思い出します。

それはまだ、ぬこがこの海鳴に来たばかりの頃でした。

小春日和の暖かい日差しの下で、今日もぬこはお昼寝状態。いやいや、それしかすることがないのだ。
ぬこは高町家に養われるようになつて以来、外へは一步たりとも出ではいなかつた。

初めは安地での安らかな生活に満足してたぬこですが……

……いい加減、飽きてきてストレスがマッハです。

時折、庭を訪れるスズメたち。
遠く海の方を優雅に飛んでるカモメたち。

自由つていいなー。

なんて思いながら、庭でチュンチュン鳴いてるスズメにターゲットロック。

おなかはすいてないけど、暇なせいか狩猟意欲がどんどん高まつてく。

ぬこは前世の人間だつた頃の感情を消し、肉体の欲求のまま身を伏せた。

……ジリジリと焦げるような感覚。

呼吸を抑え、気配を周囲と一体化させる。

10分がたつた。

でも、ぬこは動かない。

20分が過ぎた。

でも、ぬこはまだ動かない。

30分が過ぎた頃、ようやくズズメの一匹が、ぬこの一足飛びの範囲にやってくる。

すうっと静かに、だけどもとても大きく息を吸い込んだ。四肢の筋肉を限界まで突つ張らせ、脳内に描くイメージは、ママネコがフクロウを狩った時の抜爪牙。

……よし！ いける！！

ぬこは、『』のように引き絞られた肉体を解き放つ！
いや、解き放とうとした瞬間……

「ただいま。ぬこ、いい子にしてた？」

玄関を通らず、直接庭へと来たみゅーのおかげで、ばやぢばやぢひーと一緒に飛び去っていくスズメたち。

「みやー……」

遠く、爪と牙が届かない場所へと飛んでくスズメたちを無念の思いで見ていると、みゅーがぬこの首根っこを掴んで持ち上げた。そして中学生にしては程よく育った柔らかい所にぬこを挟み、

「あー、癒される……」

はふうーとため息。

みゅーは中学3年生。

受験生なのです！

みゅーもストレスがマッハなのです！

だからぬこがおっぱおにペシペシぬこパンチ食らわせて抗議しても、そんなんまつたく気にしねえー。

ぬこを抱いたまま家中に入ると、ソファーに座つてぬこを頬ずり。

ぬこが嫌がってるのは解つてゐるけど、今はストレス解消の方が大事みたい。

そしてブツブツと愚痴り始めるみゅー。

「大体さあ、私って受験生なんだよ？ なのに恭ちゃんつたら……そりゃあ剣術好きだし、やるつて決めたのは私だけじゃ……」

「こつなつたらもうどうにもならない。

ぬこは仕方なく、「にゅあ」とみゅーの話に相槌します。まあ、みゅーは大切な家族の一員ですからね。

「そりなんだよ！ 恭ちゃんは横暴だよ！ 大体普段は勉強しない、授業もまともに受けないダメダメ学生のくせして、しつかり高校入試をパスしてるとかありえないってぬこも思わない？ そのせいで私のハードルが上がつてんだよ？ だって考えてみてよぬこ！ もしも私が入試に失敗したら……」『あの』恭ちゃんでさえ受かつた高校に落ちたつてレッテルがあーっ！ そんなプレッシャーがかかってる私に意地悪ばつか言うんだよ！ 鬼畜だよ！ 鬼だよ！ 悪魔だよ！…』

「そりか……鬼畜で鬼で悪魔か……」

感情を抑えたおどろおどろしい声が聞こえたかと思うと、メキメキメキメキッ！ と骨が軋む音。

「にゅあ、にゅあ……」

恐怖に震えるぬこの視線の先は、いつの間に帰つてきてたのか、み

みゅーの頭を驚掴みする「じゅじん」の姿。

「じゅじん」の握力は80kgオーバーの人外クラス。

そんな人外パワーで驚掴みされたら、みゅーの頭蓋骨が割れてしま
いますよ！？

「みぞやーつ」

みゅーの断末魔の叫びに、ぬこはぬこ耳をぱたんと閉じて、聞こえ
ない、聞こえない……

つて、「じゅじんやつすのだ！」

「ふむ、大丈夫か美由希？」

「あたたた……酷いよ恭ちゃん……」

みゅーは抗議の声を上げると、そのまま不貞腐れてソファーに沈ん
でしまいます。

そうして再び、今度は「じゅじん」に聞こえる様に文句を言い始めた
みゅー。

「じゅじんは苦笑いしながらソファーに腰掛け、不貞腐れて顔をソ
ファーに埋めたままのみゅーの頭に手を置きます。

ビクッと恐怖に身体を強張らせるけど、次の瞬間にはふこやーつと
力が抜け落ちた。

みゅーの髪を、「じゅじん」が優しく手つきで梳き始めたからです。

「えへへ……」

「美由希、お前なら大丈夫だ」

「……うん。うんっ……」

なんでしょう、この空氣は……？

突如桃色空間となつた高町家内で、ぬこは置いてけぼり感でいつぱいに。

「みつー！」

「のコア充！」じゅじんめー！

「なーーー！」

股間が弾けて逝っちゃまえー！

瞬間、ごしゅじんによつてポイッと投擲されたぬこは、華麗な空中3回転で床に着地すると、とある事実に気づいてずーんと落ち込んだ。

そうだ、やうなのだ！

ぬこは前世の人間だった頃の200年、童貞くんで人生を終えてしまった。

そして今生のぬこ生は……

ぬこはぬこであらうと誓つたけれど、流石にけだもの相手は御免被りたい。

かといって、ぬこのだから人間と結ばれるのもまた違つ氣がする。

……もしかして、ぬこのこれからぬこの生は、灰色ぬこの生が約束されてしまつているのです？

「じつしたぬこへ。」

様子のおかしこぬこへ、「じゅじんが心配せつに声をかけるとい、

「みやみやみやみやみやみやみやみやみやみやあーつ！」

狂つたように鳴きながら、家中を駆け回り始めます。

縦横無双。ぬこ無双。

あまりの事態に顔を見合せないじゅじんとみやーは、

「……家の中に閉じこもつぱなしだから、ストレス溜まってるこ
じやない?」

「わづかもな

頷き合ひ。

「こちよじこめ、しまし異田やるい、

「出か十のんぬ」

そつ壇ひて、壊れたみたいに暴れまくゐるヒョウと捕まえます。

それでも暴れるぬの背中を優しくポンポンと叩きながら、

「美由希、ぬこの首輪を買つてくれ

「うふ、わかつた

「それをするなら、これからは田舎に外で散歩してもいいだろ。だから、ぬ。今日は俺との散歩で我癒しどけ

「みやー? ……みやー。」

ぜーたくは言わない。
ぬことして、彼女が欲しいことも言こません。

だから、せめてお外で駆け回りたいのだ。

いいや、もうちょいぜーたくに、お友達が欲しい。

ずっと、ずっと、ザーッとぬこと一緒にいてくれるよつな、可愛い

おんにゅのこのお友達が……

彼女いらなーとか言いながら、女の子（メス?）の友達探しにこうとしているぬこに、『じゅじゅんとみゅーは微笑ましやうにしています。

もしもぬこの心の内が読めたなら、きっとその笑みは彫りますのにね。

それには。アナタ、そんなこと聞いて本当にだいじゅうぶ?

とある学校の、とある教室の放課後風景。

今週の掃除係が元気一杯！　お掃除頑張ります。

その中のひとり、金髪美少女が突然に顔を顰めました。

「……何かしら…すんごく不快だわ」

わなわな震え、手に持つモップの柄がギシリと嫌な音を立てます。

「あ、アリサちゃん、どうしたの？」

ツインな栗色の髪の少女と、ロングな紫色の髪の少女が怖々と金髪美少女を伺います。

「きょう、なのほんずに行くわよ」

「ほえ？　今日は習い事の日だつたんじやないの？」

「そんなのパスよ、パス！　大体今更なのよ、あんな習い」と…
だから…の。あ、なのはにすすか！　わざと掃除終わらしてなのははんづ行くわよ…！」

「ええっ！？　もしかして私も…？　わ、わたし、今日は塾が…」

「……仕方ないわね。すずかはいいわ。なのはつ、早くするわよ…
じゃないと、なんか取り返しのつかないことになるような気がするわ…！」

アリサ・バニングス。

彼女の【女】の勘が……

「浮氣は……許さないんだから……ッ！――！」

ぬこの真実に、辿り着く……？

暖かい春の日差しの下で、大きくふわっとアクビする一匹の小狐。狐はポカポカ陽気に負けてしまったのか、眠気といつ衝動のまま神社の社務所の縁側で寝そべると、いつものようにお昼寝を始めた。春の風がさわさわと、狐のぼふぼふな毛並みを優しく撫でる。

きもひい···

そつ思いながら、狐はゆっくつとまどろみ始めた。

社務所の縁側でこうしていると感じ出す。

のするみつのこと。

憎くて憎くて憎くて···

どうしようないうらや、憎い筈のこの場所が、みつを思い出すだけで少しだけ許せるように思えてしまつ。

もちろん、それは錯覚なのだろう。

怨嗟を糧にして、育ちに育つた負の想いの集積体【祟り】。

その大部分を封じられているからこそ、そう思えるのだ。

でも……

ゆらり。

狐は心地よさげにしつぽを揺らした。

ぱた、ぱた、ぱた、ぱた、ぱた……ん。

ゆらゆら揺れるしつぽが、最後にパタン、と地面をたたく。狐は、完全に眠りに落ち、失われてしまつた大切な人達の、夢を見る……

みつ……

狐が親とも慕い、獣の道を外れる切欠となつた巫女の名前。

わたし? お嫁に、行きたかったんだあ。
だからね、きつね。私の代わりに……

やた……

大切な、大切な……
狐が愛した人の名前。

「ごめん、久遠。ぼくはきみの亭主にはなれなかつたね。
でも、できればだよ？」

きみはその名前の様に、いつまでもこつまでも……
ぼくの好きなきみでいて。

そして、ぼくの分まで、幸せに……

みつは、殺された。

山の神様を鎮める供物となるために。

やたは、殺された。

疫病を流行らせたと責を負わされ、石で殴打され、四肢を裂かれ、
ちぎられ……

人の形を成さなくなるまで髣られて。

…………ゆうゆう揺れる。

神社のやぐらから吊るされて、ゆうゆうすくすくひら。
影が揺れる。やたの、首のない影が……

そうだ、ふたりは白い服の男に、コロサレタツ。

厳重に封印された筈の黒い感情が、身の内の奥から湧いてくる。

憎い、憎い、憎い、憎い、二クイ、二クイ、二クイッ！

憎悪や怨念と呼ばれる暗く濁んだ感情が、久遠の中から溢れだす。

ただ会いたい。もう一度あの人に会いたいだけなのに。

狐を獣の領域から外させ、化け狐となる因をつくつた。
どこまでも純粹なその想いが、久遠を『祟り狐』と呼ばれる怨霊へ
と変えてしまった。

……いつたい、誰が悪かったのだろう？

わからない。わからないけど……

ただひとつ。はつきり解ることがある。

久遠の怒りと悲しみが、

目に映る全てを破壊しても、まだ治まらないことだ。

久遠に架せられた封印の鎖が、キシリと音を立てる。
湧き上がる怨靈としての衝動を、解き放たんがために。
でも、チラリと頭をかすめる沢山の笑顔。

かおる。 こうすけ。 あい。

そして、なみ……

みつや弥太に負けないくらい、大切な人達。
他にも神咲家のの人達や、さざなみ寮の人達が、みんなみんな、久遠
に笑いかけてくる。

怨念を解き放つてしまえば、この笑みは無くなってしまうのだろう。

でも、まだ足りない。

久遠の暗い衝動を抑えるには、まだ……

と、その時です！

ふわりと久遠の鼻をくすぐるおひさまの匂い。
みつや弥太とおんなじ、おひさまの匂い……

苦悶の表情を浮かべて眠っていた久遠は、そのおひさまの匂いに心が穏やかになつていいくのを感じていました。

そして……

ペしん！ とかに叩かれます。

くう？（なに？）

久遠がやつと思つていると、声が聞こえます。

「みやーー。みやーー。」（しゃじんー。）（しゃじんー。）

「どうしたぬ！」

「みやんみやんみやーんー（これーこれー食つていい？）

「……ダメだ。飼われてるんだろう、首に鈴を付けてる」

「……（うわあー）（うわあー）」

「へへー（うわあー）？」

命の危険を感じた久遠は、ものっそい勢いで飛び起きます。

そして物騒な会話をしていた、真っ黒い人間と、真っ黒い毛玉な子猫に恐怖します。

慌てて久遠は後ろに飛び退き、一人と一匹のへりへりコンビから距離を取りました。

なんで？ どうして？

久遠の頭は【はてな】でこつぱい。

だって久遠は臆病だから、気配とかの察知に長けてます。

なのに、ペシッと叩かれるくらい近づかれるなんて、ありえないっ！

「ウ、ツー！」

警戒に唸る久遠。

でも、ぬことじゅじんは呑氣なものだ。

「みやあつ（ほら、しょせん狐はぬこの敵）みやうん？（食べちゃつてもいいんじゃなー？）」

「だからダメだと書いてる。飼い主に訴えられでもしたらやっかいだしな」

「ヒハ……（それもそうか……）ヒー（あーあ、せつかくの子狐なんて滅多にない獲物）みやーん（もつたいないなー）」

まづこまづこまづこつ！

どうやら狩りれる心配はないみたいだけど、それでも何されるか分かつたモンじやない！

久遠は「、ーツ！つて唸りながらジリジリ後ずさり、一定の距離が離れるなり脱兎の」ごとく逃げ出した。

そのまま社務所のある場所から境内を抜けた敷の中に飛び込みます。さつきのぐるぐるコンビはついてこない。

久遠はホッと胸を撫で下ろしながら、敷の中から顔だけピヨコンとだしました。

すると、ぐるぐるコンビは久遠なんて氣にもとめず、

「みやーつ」

「ん、なかなかいい攻撃だ」

楽しそうにじゅわ合ひました。

……必死で逃げようとしたのがバカみたい。

でも……

久遠はびくびくしながらも、ぬいじゅじゅじんの戯れる姿から田がはなせない。

「こべぞ、ぬいじゅー！」

「じゅじんは、ぬこ田掛けて蹴りを放つ。

もちろん手加減してるだろう、その蹴りは、でも久遠から見たら随分強力で。

ちっちゃな子猫にしていい攻撃じゃ、決してなかつた。当たれば死ぬ。そんな一撃！

でもぬこは「みやあつ！」と蹴りを後ろに飛んで避けると、その反動を使って逆に攻撃に出た。

黒い毛玉が、「じゅじんの顔面田掛けて放たれる！」

「じゅじんはぬこの攻撃に焦らず慌てず、ぽふっと受け止めやや乱暴な手つきでぬこの全身を撫でおわします。

「な～」

気持ち良さそうなぬこの鳴き声。

「じゅじんも楽しそうに笑つてる。

そんな一人と一匹を、久遠は藪の中からこつまでもこつまでも眺めていました。

ぬ」と久遠の出会い篇、もうちょい続きます。

注！この作品は、原作とらハシリーズを知っているものとして書いてます。それはこの先も変わりません。

つてわけで、今回名前の出たとらはキャラを知らない人のための人物紹介

みつ……小説版、とらいんぐるハート3 那美・久遠篇に登場するオリジナル人物。

久遠がまだただの狐だった頃に出会った巫女さん（数えで16才）で、ひとりぼっちの久遠は彼女に母親を重ねていたらしい。みつは親を幼い頃になくして以降、神主に育てられた。

食事中、久遠におかずの魚を奪われそうになり箸を突きつけようと怯えてフルフル震える久遠の愛らしさにまけて半分ご

それ以来、久遠に懐かれて友達となる。

近所に住む源吉と言う名の青年と想いが通じ合っており、彼のもとにお嫁にいくのが夢だった。

だが、それが叶わないことをみつは理解しており、事実、彼女が源吉と結ばれることはなかった。

孤児であるみつが何不自由なく暮らしていくのは、神の供物として捧げられるためだつたからだ。

後にみつは、嵐が原因による土砂崩れ等の災害を鎮めるためと、濁流の川に神の供物としてポイッと捧げられた。

久遠が妖怪変化になつたのは、なんとかいなくなつてしまつた（久遠はみつが死んだと知らない）彼女と会いたいがため。

人型になつた時の巫女装束も、記憶の中のみつを真似たらしい。ただ記憶がいい加減なので、変形型のコスプレ状態なんだとか。

弥太……久遠の名付け親にして彼氏。

ちなみに焼酎の酒樽に書いてあつた【久遠】という字が名前のもど。
久しく遠くへ……（笑）

真実はいつも悲しい。

フォローをするなら、いつまでもいつまでも。っていう意味が格好
よくて字面もいい。

でも焼酎の名前（笑）

それはともかく、弥太と久遠が出会うのは、みつがいなくなつてしまつてから20年強。

ある日突然に人型を取れるようになつた久遠が、調子にのつて走り回つて転んで怪我した所を治療してくれた人が弥太である。
まあ、その後色々あつて2人は結ばれる訳だが、幸せな時は続かなかつた。

流行り病によつて村が壊滅していく中、薬師であつた弥太は懸命に村中を駆け回りなんとかしようとするも、それも叶わず。

毒に耐性があつた弥太を除き、ほぼ全ての村人が病に冒された。
弥太が一人だけ無事なのを怪しんだ神主は、弥太こそが病を広めた元凶とし、死の恐怖に怯えていた村人もそう信じてしまう。

弥太は自分を捕まえようとする村人達から、間一髪久遠のいる山へと逃げ出すことに成功するのだが……

村人総出と思われる山狩りと、何より自らも病に侵されつつあることに気づいてしまい、結局は久遠を逃がす為に村へと帰つた。
その後は言つまでもないだろう。

どうやら【苦しめるための殺され方】をしたらしく、遺体は人の原型をとじめず、久遠の足元に転がってきた弥太の生首は苦悶の表情に満ちていた。

想いを重ね、身体を重ね、番いになりたいとさえ願つた弥太の残酷な殺され方にブチッと切れた久遠は、【祟り】となつて村を消滅させる。

その後は治まらない怒りと怨念で、弥太を殺した神主と同じ格好をしているという理由で日本全国津々浦々。神社仏閣を強襲し壊滅させまくった。

かある……神咲薫、とらハ2のヒロイン。

たぶん、この先出てくるんで詳しい説明はなし。

こうすけ……とらハ2の主人公にしてさざなみ寮の管理人。この作品では愛さんルートで御架月は不所持。通称ロリジャイ。

ちなみに神咲一灯流でもない、ただの人。

出番があつてもほぼモブだろう。

……弥太の辺りから面倒になつたのが丸分かりな人物紹介だつたぜ

(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0029y/>

とわのこぬこ

2011年11月20日18時56分発行